巻頭特集

手水を埋め尽くす美しい花々で心清らかに

金井神社へ初詣

感染症予防のため、柄杓の共有はもちろん、手水舎そのものを使用しない寺社が増える一方、
水場を有効活用しようと花手水が広まっている。
華やかでSNS映えすることから訪れる参拝客も増え、「お花に心が癒やされる」と話題だ。

美しい花手水に安らぐ心を清めてお参りを

季節の花を手水に浮かべた、金井神社の花手水。感染防止のため、手を洗うことはできないが、美しいものを見て晴れ晴れとした気持ちになってもらおうと用意されている。「お花をご覧いただくことにより心をお清めいただけますよう、花手水を行っております。お参りいただいた方のひとときの癒しとなりますよう、定期的に花を入れ替え、毎日お手入れをしています」と金井神社の権禰宜（ごんねぎ）・小野杏奈さん。花が少ない時は代わりに飾りを入れたり、その日に奉納された季節の花を添えたりと、彩りに日々工夫をこらす。

きっかけは感染症対策だが、もともと6年ほど前に、アジサイの花を地元の人が持ってきてくれたときに、手水に飾り、参拝者に見てもらっていた経緯がある。花が浮かんだ様子はとても彩り豊かで、フォトジェニックなスポットとしてSNSでも話題となっている。

境内では、色とりどりの風車が風を受けてクルクルとまわる音が響く。金井神社では絵馬として飾られていて、羽根には参拝者それぞれの願いが書かれている。「風が悪いものを流してくれたり、また風に乗せて神様に願いが届くように、そんな思いを込めています」と小野さん。

戌（いぬ）の日に姿を見せるのが、張り子人形の大きな犬で、狛犬のように2体が並ぶ。犬はお産が軽くすみ、たくさん産むことから、安産や母子の健康はもとより、子が丈夫に育つようにと祈願する参拝者に向けた取り組みだ。これは小野さんの考案によるもので、女性神職ならではのアイデアが効いている。人気のフォトスポットとして、七五三のシーズンには家族で写真に収まる姿がよく見られた。

金井神社 権禰宜
小野杏奈さん

境内の装いや御朱印が話題となるが、基本的には神様をお祀りしているのが神社。神様にご挨拶をすませてから思い出に残る時間を過ごしたい　1 張り子の狛犬と月毎の御朱印　2 3 美しい花手水に喜ぶ園児たち

カラフルな御朱印は月替わり消しゴムはんこで手作り

金井神社の御鎮座八百年の節目を機に、「神社を身近に感じてもらえるように」と、令和2年6月から月替わりの御朱印を授与している。御朱印は、季節に合わせてデザインを変更し、花や風物詩をテーマに描いた2種類がある。色鮮やかな御朱印を求めて毎月訪れる人もいるという。「家に持ち帰って振り返ったときに、その日がどんな日だったか、誰とお参りしたかなど、そんな参拝の記憶が蘇るよう、季節感を大事に、色彩などに気を配っています」。デザインは小野さん手作りの消しゴムはんこがベースになっていて、描き入れる柄も毎年、毎月変えている。細かな作業は得意なほうで、幼い頃は漫画を描くことが好きだった。画材屋にも通ったことから、そのときの知識が役立つこともあるという。彫る作業は楽しいというが、構図を考えるのが毎月のプレッシャーだ。一年前と同じ題材を扱うにしろ、図案は変えているほか、短時間に仕上げることも考慮し、版数などに注意している。

社頭にて一枚ずつ、すべて手押し、手書きする。「一つに10分から15分、事前予約は行っていないので、混み合ってしまうとお時間をいただく場合がございます」。そんなときは御朱印帳を預けて、近隣に食事に出かけたり、いなべの町を観光する人もいるそうだ。

「風に乗せて神様に願い事が届きますように
また悪いものを流していただけますように」

お守りもアイデアあふれるものが並んでいる。社紋の彩りが目を引く「かない」に懸けた「叶守」や、ハート型のお守りもある。古来より寺社の建築装飾にハートの形が取り入れられているが、これはイノシシの目を模したもの。災厄を退けて福を呼ぶという厄除けの効果があるとされ、この文様を取り入れた「猪目」は、女性であればバッグチャームにして、常に持ち歩くこともできる。また、大きな「大福叶守」は、神棚のない家も増えている中、まずはお守りをリビングなどに置き、その御加護を感じてもらいたいと始めた。

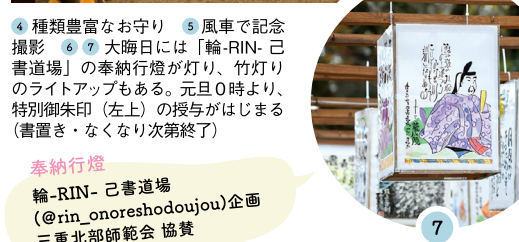
これらは、国民の信仰心が薄くなり、神仏に手を合わせる頻度が少なくなったと感じたことがきっかけ。信仰や文化を伝えていくのが神職の務めであり、若い世代にも神社を身近に感じてもらいたいとの思いからだ。

4 種類豊富なお守り　5 風車で記念撮影　6 7 大晦日には「輪-RIN- 己書道場」の奉納行燈が灯り、竹灯りのライトアップもある。元旦0時より、特別御朱印（左上）の授与がはじまる（書置き・なくなり次第終了）

奉納行燈
輪-RIN- 己書道場
(@rin_onoreshodoujou)企画
三重北部師範会 協賛

地域に親しまれた神社の歴史と文化を受け継ぐ

金井神社には近隣の人々が日課としてお参りに訪れているが、県境に近いことから、愛知はもとより、滋賀や岐阜など県外からの参拝者も多い。

金井神社は、13世紀初め、天災や飢饉で地元に多くの死者が出たことから、鎌倉時代の承久3（1221）年、伊勢神宮より勧請し、豊作や安全を願い創祀された。「ちょうど大河ドラマ『鎌倉殿の13人』の時代と重なりますが、この辺りは鎌倉と京の間にあって、荒れた土地。生活に困った村人は藁にもすがる思いで、この場所に勧請したんだと思います」と小野さん。明治時代になって金井、春日、金巌の三社を合祀、今日にいたるまで金井の郷の氏神として、崇敬を集めている。

父であり宮司の種村睦（たねむらむつみ）さんについて行って、小学校3年のときから、地域の祭りを手伝ってきた小野さん。「地元の皆さんによくしてもらい、お祭りのお手伝いの中で自分の存在もあるんだ」と思えるようになり、それは高校卒業まで続き、大学では神道学科を選んだ。「神社は一社ごとに色があってよいと思うんです。これまで一定数の参拝はありましたが、月替わりの御朱印を始めたことで、遠方から参拝に来てくれたり、インスタグラムをきっかけに知ってもらうこともあり、若い人も神社へ足を運んでくれるようになりました」。日本人の暮らしの中に、神社参拝の文化を伝えている。

金井神社
（住所）いなべ市員弁町北金井911
（電話）0594-88-5588
（御朱印受付時間）午前9時～午後3時
※1月9日までは休館日なし

火曜日は書置きでのお授け。水曜は社務所休館。祭礼日は祭典準備のため書置きのみの対応となる場合がある

文／中村元美　写真／西井正樹・金井神社　デザイン／chica